

中学校

平成 5 年 度

教育 研究 員 研究 報告 書

特別活動

東京都教育委員会

平成 5 年 度

教育研究員名簿（特別活動）

分科会名	区市町村名	学 校 名	氏 名
第 一 分 科 会	世 田 谷 豊 島 荒 川 板 橋 足 立 三 鷹 国 立 東 大 和	桜 丘 中 学 校	高 城 淳 之
		池 袋 中 学 校	藤 田 悟
		第 六 中 学 校	浅 川 隆
		第 五 中 学 校	加 藤 敏 久
		江 北 中 学 校	木 村 正
		第 七 中 学 校	手 塚 啓 一
		第 一 中 学 校	◎ 木 下 勤
		第 二 中 学 校	松 沼 英 雄
第 二 分 科 会	大 田 中 野 杉 並 練 馬 江 戸 川 八 王 子 町 田	東 蒲 中 学 校	村 上 昭 夫
		第 十 中 学 校	市 野 聖 美
		向 陽 中 学 校	宇 内 英 雄
		豊 玉 中 学 校	○ 殿 村 靖 廣
		南 葛 西 中 学 校	浦 田 哲 男
		横 山 中 学 校	渡 辺 好 造
		南 中 学 校	花 田 英 樹

◎ 世話人 ○副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 山 本 修 次

研究主題

集団や社会の一員としての自覚を深め、自己を
生かす能力・態度を育てる特別活動

目 次

I	主題設定の理由	2
II	第1分科会 『討論を通して、自己表現能力を育成する学級活動』	
1	副主題設定の理由	2
2	研究の内容	
(1)	研究構想図	3
(2)	自己表現能力について	4
(3)	ディベートの導入	4
(4)	ディベートについて	4
(5)	ディベートを取り入れた年間指導計画	6
(6)	学級活動指導実践例	7
3	研究のまとめと今後の課題	
(1)	アンケートの結果から分かること	11
(2)	その他の成果	11
(3)	今後の課題	13
III	第2分科会 『生徒会活動の活性化を図り、生徒の自治的な能力を育てる』	
	～実践を通して～	
1	副主題設定の理由	14
2	研究仮説の設定	14
3	研究の内容	
(1)	研究構想図	15
(2)	生徒会活動に対する生徒の興味・関心の調査	16
(3)	「校則改正（体育館の開放）への取り組み」の実践 A中	18
(4)	「アルミ缶リサイクル運動」を見直し、文化祭での発表を通して 活性化される取り組み B中	20
(5)	「生徒総会を活性化させる取り組み」へ指導の実践例 C中	22
4	研究のまとめと今後の課題	24

集団や社会の一員としての自覚を深め、 自己を生かす能力・態度を育てる特別活動

I 主題設定の理由

学校をとりまく社会情勢の変化の中で、生徒が学校内外で望ましい集団活動を行ったり、各種の体験的な活動に参加し、自らの心身を進んで鍛えることに消極的になりつつあるとの指摘がある。こうした中で、たくましく生きる子供たちを育成し、多くの人々とともに生きていく力を養うことが、学校教育の大きな課題になっている。

そこで、本年度の特別活動の研究では、学級活動及び生徒会活動を通して、次の活動への自信と旺盛な意欲を育成することを目標として、研究主題を「集団や社会の一員としての自覚を深め、自己を生かす能力・態度を育てる特別活動」とし、学級活動と生徒会活動の研究実践から、本主題に迫ってみた。

第1分科会では、集団の中で自分自身を生かし、かつ友人を理解し尊重することに必要である自己表現能力を、学級活動を通して高めることをねらいとして、「討論を通して、自己表現能力を育成する学級活動」を副主題とした。

第2分科会では、副主題を「生徒会活動の活性化を図り、生徒の自治的能力を育てる」とし、生徒会活動を全校的な活動として広げ、生徒の自発的・自主的な活動を通し、生徒会活動そのものを活性化させていくことによって、自治的能力を育てていくための研究実践を行った。

II 第1分科会 「討論を通して、自己表現能力を育成する学級活動」

1 副主題設定の理由

学級活動では、生徒が学級の一員として役割を分担したり、学級の様々な問題の解決を図るために協力しあったりするなど、多様な経験をし、将来の社会の一員として必要な資質を身につけていくことが大切である。そのためには、集団の中で自分の能力や可能性を生かし、友人の考えや意見を理解し合い、生徒相互の「信頼関係」をつくる必要がある。

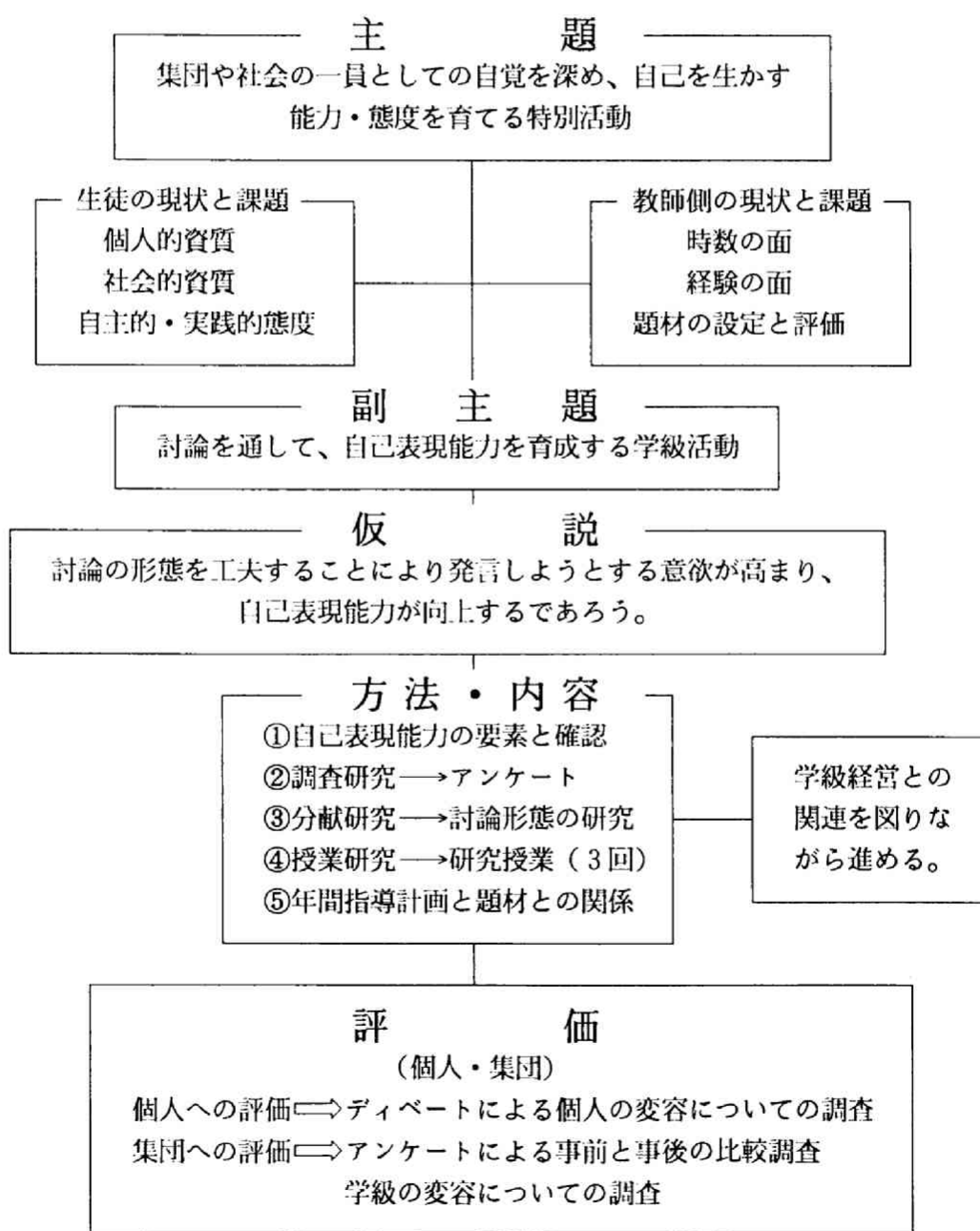
しかし、最近学級活動の場面では、集団の改善向上を図るための活発な討論や話し合いが停滞気味である。集団の中で話し合う場合に、自分の意見を論理的に主張できない、他人の意見を聞こうとする態度に欠ける、建設的な話し合いが進められない、などがある。その要因としては、はっきりとした自分の考えや意見をもてない、友人など第三者の影響を受け易く依存心が強い、討論のテーマに対する興味や関心を示そうとせず意識も薄い、相手を説得

できる発言ができない、などがあげられる。本来、生徒は発言することの必要性や喜びは感じており、話し合いのルールも分かり、自己を表現したいという欲求がある。しかし、生徒相互の人間関係の問題や表現の方法が分からなかったり、発言の機会が少ないなどが大きく影響し、活発な討論ができないと考えられる。

そこで、本分科会では、討論の形態を工夫することにより、発言しようとする意欲が高まり、自己表現能力を向上させることができると考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

(1) 研究構想図



(2) 自己表現能力について

本分科会では討論活動によって自己表現能力を育成したいと考え、その要点として自己の「発言」と他の意見を「聞く」という側面から、以下のように共通理解を図った。

自己表現能力の要素

発 言

- ①話し合いに対して興味・関心を持つ。
- ②はっきりした考え・意見を持つ。
- ③自分の意見をまとめることができる。
- ④相手に分かるように表現できる。

聞 く

- ①相手の意見・考えを聞く態度が身に付いている。
- ②相手の意見・考えを正しく聞き取れる。
- ③相手の立場を理解できる。

(3) ディベートの導入

討論形態には様々なものがあり、パネルディスカッション、バズセッション、ロールプレイングなどはよく知られている。本分科会では副主題設定の理由でも触れたように友人の発言に左右されやすい傾向、討論に消極的な傾向の生徒も含めたすべての生徒が討論に参加し、自己表現能力の育成のためにより効果が期待できるものとしてディベートを取り上げ、学級活動において授業実践することにした。そこで事前に予想されるディベートによる期待できる効果と問題点（留意点）を次のように考えた。

期待できる効果

- ①発言意欲が高まる。
- ②理論的な発言力が身に付く。
- ③多様な発想ができるようになる。
- ④自分の価値観を確認できる。
- ⑤人の話を聞く態度が身に付く。
- ⑥班などで協力する態度が身に付く。

問題点（留意点）

- ①自分の思っていることを発言できない場合もある。
- ②感情的な意見になる場合もある。
- ③判定の際公平さに欠ける場合もある。
- ④題材によって適さないものもある。

(4) ディベートについて

ア ディベートとは、ある一つの論題を2組のチームが、肯定派・否定派に分かれ、議論を行い、最後に第三者の判定で勝敗を決定する討論ゲームである。

イ ディベートの方法と留意点

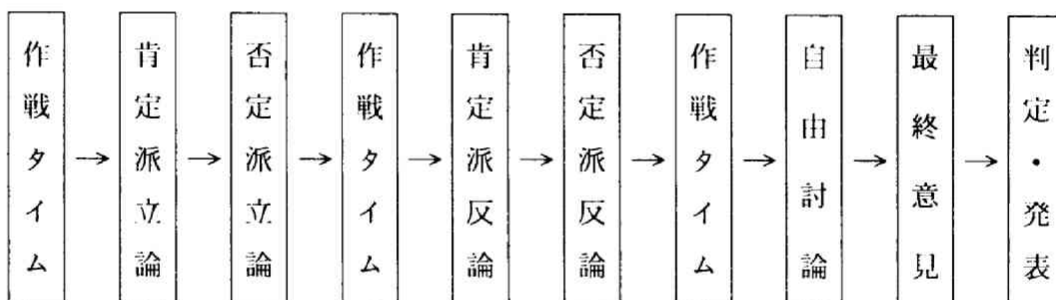
- ① 資料を使って、生徒にディベートによる討論の方法を説明する。3つのグループを

ローテーションすることにより、全員の発言の機会を増やす。

- ② テーマの選定は論点が具体的なもの。興味関心をもち、生徒の視野が広まるもの。論理的思考が期待できるもの。情報収集が容易で事前学習が過度にならないもの。
- ③ 留意点は個人攻撃にならないようにする。勝負にこだわることをないようにする。多くの生徒に発言させるようにするなどである。

ウ ディベートの実際

- ① 自分の主張を通すために、相手の言い分を聞く姿勢と司会者の進行に従うルールの確立を図る。ビデオ視聴を加え、ディベートでの話し合いの方法を確認する。司会者に対して教師の適切な助言により討論の活発化を図る。
- ② 各グループのチーフを決めておく。チーフは作戦タイムの時のまとめ役になる。チーフは審判の係になったときは、司会をする。
- ③ ディベートの進め方



判定用紙

テーマ 『 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 』

	肯定派	否定派
1. 説得できる発言をしたか	1 2 3	1 2 3
2. 言葉がはっきりしていたか	1 2 3	1 2 3
3. 相手の意見を聞いていたか	1 2 3	1 2 3
4. 多くの人が発言したか	1 2 3	1 2 3
5. 全員が一生懸命取り組んで、努力したか	1 2 3	1 2 3
合 計		

肯定派 () 班 否定派 () 班 審判 () 班

肯定派の集計

						総合計	平均

否定派の集計

						総合計	平均

※審判員の得点中で、最高点と最低点を除き、平均点を出し勝敗を決める。

エ 評価

《個人として》

- ①自分の考えを適切に表現し、相手を説得させることができたか。
- ②相手の話を正確に聞くことができたか。
- ③興味関心を持ち、意欲的に取り組むことができたか。

《集団として》

- ①チームの活動を通して、協力性や生徒相互の人間関係を向上させることができたか。
- ②多くの生徒が、発言することができたか。
- ③協力して情報収集し、その活用を図ることができたか。

(5) ディベートを取り入れた学級活動の年間指導計画

学級活動の年間指導計画は、学校の実態や生徒の発達段階を考慮しながら、各学校・学級の創意工夫を生かしていくことが必要である。その中で、学級の雰囲気は、学級活動を円滑に進めていく上で大切なものと言えよう。年間指導計画の中に、以下のようなねらいからディベートのテーマを設定した。ただし、テーマ設定には、学級活動の目的からみて適さない題材もあるので、充分配慮することが必要である。

- ① 学期の初めに設定し、話し合える雰囲気づくりをめざす。
- ② 話しやすいテーマによって、学級の話し合いルールの確立をめざす。
- ③ 話し合い活動の活性化を図りながら、諸課題を考える機会とする。
- ④ 話題づくりによる学級のまとまりを図る。
- ⑤ 継続的に行い、生徒の自己表現能力の育成をめざす。

年間指導計画例

↳ ディベート用テーマ

学期	月	1 学 年	2 学 年	3 学 年
一 学期	4	○中学生になって ○中学校の給食 ↳ 給食と弁当	○2年生になって ○読書指導 ↳ マンガと読書	○最上級生になって ○家庭学習の工夫 ↳ 塾と家庭学習
	5	○学級活動と生徒会 ○中学生の勉強 ○移動教室への参加	○学習の工夫 ○生活の点検 ○自分の将来について	○自分の目標と生活時間の工夫 ○修学旅行への取り組み
二 学期	9	○二学期の学級生活 ○男女の平等と協力 ↳ 男と女	○二学期の過ごし方 ○学習と部活動 ↳ 朝練の有無	○二学期の心構え ○交通安全 ↳ 免許と年齢
	10	○役員選挙と生徒総会 ○文化祭への取り組み ○職場訪問	○役員選挙と生徒総会 ○文化祭への取り組み ○高校訪問	○生徒総会 ○文化祭への取り組み ○進路相談
三 学期	1	○新年度の夢 ○生活時間の見直し ↳ 冬休みの宿題の有無	○私の将来 ○男女交際について ↳ 手紙と電話	○新年の抱負 ○学校生活と友情 ↳ 標準服と私服

(6) 学級活動指導実践例

ア 指導のねらい

- ・論理的な思考、判断、発表の能力を育てる。
- ・相手の話をよく聞くマナーと、情報を的確に活用する能力を身につけさせる。
- ・自分とは異なる意見や立場を尊重する態度を育て、自由で闊達なコミュニケーションができる学級にする。

イ 展開の過程

① 事前の指導と生徒の活動

- ディベートとはどのようなものかをビデオを使い紹介する。(学活)
- クラスの生徒を分けて、3チームをつくる。(短学活)
- 肯定側・否定側・審判側の役割を決め審判係には判定の観点・採点方法を説明する。
(短学活・放課後)
- リーグ戦方式で、テーマを変えて総当たりのディベートを行う。(学活)

② 本時の展開

学習の流れ	活 動 の 内 容	指 導 上 の 留 意 点																														
活動の開始	<ul style="list-style-type: none"> ・開会とテーマの確認 「学校での昼食は給食より弁当がいい」 	<ul style="list-style-type: none"> ・立場や係、ディベートのルールについて再確認する。 																														
<p>展開</p> <p>ディベート の実際</p> <p>判定</p>	<table border="0"> <tr> <td><作戦タイム></td> <td>3分</td> </tr> <tr> <td>・肯定側 立論 ①</td> <td>1分</td> </tr> <tr> <td>②</td> <td>1分</td> </tr> <tr> <td>・否定側 立論 ①</td> <td>1分</td> </tr> <tr> <td>②</td> <td>1分</td> </tr> <tr> <td><作戦タイム></td> <td>3分</td> </tr> <tr> <td>・否定側→肯定側 反駁</td> <td>3分</td> </tr> <tr> <td>・肯定側→否定側 反駁</td> <td>3分</td> </tr> <tr> <td><作戦タイム></td> <td>2分</td> </tr> <tr> <td>自由討議</td> <td>6分</td> </tr> <tr> <td><作戦タイム></td> <td>3分</td> </tr> <tr> <td>・最終意見 肯定側</td> <td>2分</td> </tr> <tr> <td>・最終意見 否定側</td> <td>2分</td> </tr> <tr> <td>・判定（集計の間を利用して審判係に感想を聞く）</td> <td></td> </tr> <tr> <td>・結果発表</td> <td></td> </tr> </table>	<作戦タイム>	3分	・肯定側 立論 ①	1分	②	1分	・否定側 立論 ①	1分	②	1分	<作戦タイム>	3分	・否定側→肯定側 反駁	3分	・肯定側→否定側 反駁	3分	<作戦タイム>	2分	自由討議	6分	<作戦タイム>	3分	・最終意見 肯定側	2分	・最終意見 否定側	2分	・判定（集計の間を利用して審判係に感想を聞く）		・結果発表		<ul style="list-style-type: none"> ・計時係の生徒に正確に公平に時間をはかり「めぐり」で時間を知らせるように指導する。 ・司会の生徒に対し討論が正しく成立するよう指導する。 ・チームメートが援助したり相手の意見をメモすることを助言する。 ・意見が出にくかったり、議論がかみ合わない時、討論が正しく行われるように助言する。ただしメモを渡したり発表者以外に行ったりして進行を妨げないように配慮する。
<作戦タイム>	3分																															
・肯定側 立論 ①	1分																															
②	1分																															
・否定側 立論 ①	1分																															
②	1分																															
<作戦タイム>	3分																															
・否定側→肯定側 反駁	3分																															
・肯定側→否定側 反駁	3分																															
<作戦タイム>	2分																															
自由討議	6分																															
<作戦タイム>	3分																															
・最終意見 肯定側	2分																															
・最終意見 否定側	2分																															
・判定（集計の間を利用して審判係に感想を聞く）																																
・結果発表																																
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者からディベートについての評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・賞賛的に行う。 																														

③ ディベート研究授業記録(抜粋)

肯定立論	1	給食は食べ残しが多い。弁当はバランスがとれていて、親の愛を感じる。
	2	弁当の場合、みんなの食事がいろいろなので見ているだけで楽しくなる。
否定立論	1	弁当作りは手間がかかる。経費もかかる。アンケートによると給食の約2倍だ。
	2	弁当は腐りやすい。栄養のバランスはむしろ給食の方がとれている。
司会		ここで作戦タイムです。各チームとも席を立て話し合ってください。
反駁否→肯		栄養のバランスについては、断然給食だ。なぜなら栄養士さんがいるからだ。
反駁肯→否		後かたづけや予算のことは親が考えることだ。腐りやすさは夏ならともかくほかの季節は問題ない。バランスについては個人差がある。
司会		ここで再び作戦タイムです。
司会		作戦タイム終了です。ここからは自由討論です。挙手をして答えてください。
肯定	1	バランスが話題として提起されたが、先日、枝豆と焼きそばというものすごいメニューが給食にでた。あれはバランスを考えているとは思えない。
否定	1	焼きそばパンだって売っている。反論としては弱いと考える。
		・・・中略・・・
否定	2	弁当は本来暖かい料理はさめてしまうし、冷たい料理はぬるくなってうまみが損なわれてしまう。給食はそれが少ないと思う。
肯定	2	給食は現実に食べ残しが多い。満腹感が少ないと思う。
否定	4	給食には準備が必要だ、これは大事な学習活動のひとつだ。
司会		時間です。ここで最終意見のための作戦タイムに移ります。
最終意見 (肯定)		弁当はつくることで親子のコミュニケーションをはかることができる。弁当なら満腹感が得られ間食が減りこれも弁当の長所だ。アンケートからも「弁当がよい」という意見が多くみられる。給食は準備に時間がかかる。空腹時には困る。やはり弁当の方が優れている。
最終意見 (否定)		給食はちょうど良い温度で食べることができ、つくる人はマスクをするなど衛生的だ。好きなものだけ食べればぼくのように太る。給食ならいやでも食べる。やはり給食の方が優れていると考える。
教師		判定ができるまで感想を聞きます。
審判係		肯定側は否定派に対しすばやく反論していた。否定側は論点に筋が通っていた。
司会		結果を発表します。肯定側13.3否定側13.1で肯定側の辛勝です。

④ 研究授業のまとめ

- a ディベートは、ゲーム感覚的要素が強いため「話しやすい」雰囲気が出ていった。
- b 何回か実施する中で、ディベートの楽しさが生徒に理解されてきた。
- c 相手の意見に反論するためメモを取り、相手の意見を聞く生徒が増えてきた。
- d 自分の考えと違う立場で発表することもあり、違う立場を理解できるようになった。
- e 発言が少ない生徒も友達の発言を聞くのはおもしろく、人の意見をしっかり聞き自分も意見を発表しようとする生徒が現れてきた。
- f クラスの信頼関係が深まり、他の行事の取り組みも活発になっていった。

⑤ 授業の改善への工夫

- a 討論が活発になるに従い、発言者が偏る傾向が出てきてしまった。
- b 判定者は判定するだけの活動だけになり、話し合いに参加させる工夫が必要になった。
- c 論点がずれたり立論に対する反駁にならずに、反駁に対する反論になる傾向がでた。
- d 展開により、感情的な言い合いになる場面が見られた。
- e 教師や司会者の方を向いて発言する生徒が多かった。

以上課題を協議して、以下のような授業の改善の工夫を考えてみた。

aについては、6班を3チームに分けて肯定・否定・判定の順に役割を代えて行き、それぞれの立場を経験させる。普段、あまり発言しない生徒を立論者（代表者）にして積極的に発言してもらう工夫をとる。また、トーナメント形式・リーグ戦などのゲーム感覚を取り入れて、発言する機会をより多く設定してみる。

bについては、判定者に集計後に感想を聞いたり、どの意見がよかったか分析させる。

cについては、教師が司会者に適切なアドバイス指示したり、教師自信が司会をするなどの工夫を繰り返し「作戦タイム」「自由討論」「立論席の設定」「発表者をペアーにする」などの工夫をさらに授業の中へ取り入れた。結果、全員が集中してより多くの意見を考えようとしたり、楽しく話し合いをするなど変容が見られた、討論活動を通して、相手の立場で物事を考え、相手の考えをしっかりと聞き自分の意見を組み立てたり、相手の立場を知るきっかけになったと思われる。学級活動におけるディベートの授業が、相手の意見を聞き自分の意見をしっかりと発言する「自己表現能力」を高めていく活動になったと思われる。今後は、楽しい雰囲気を大切にしながら、授業の工夫を考えていきたい。

3 研究のまとめと今後の課題

本研究では、学級活動の中で、話し合い活動を通して自己表現能力を高めることを、目標とした。話し合い活動の中でディベートは、生徒一人一人が、考える・発言する・聞くという能力を養うために、大変効果的であると考え、その一手段として、ディベートを用いることにした。また、ディベートの活用目的を問題解決にするのではなく、個々の生徒に応じた自己表現能力の育成とした。この視点に立って実施した結果、ディベートを実施する前と定着した後とでは、話し合い活動に対して生徒の意識が著しく向上した。

(1) アンケート結果からわかること。

次のページのグラフは、男子220名・女子217名について、ディベートを実施する前と定着した後とで、話し合い活動に対しての意識の変化を、百分率で示したものである。このグラフから、自己表現能力の要素に結びつけて、考察した。

ア 話し合いの中で、男子は40→50%、女子は20→40%と、「よく発言できるようになった」と考えている生徒が増加した。さらに、「発言することがうれしい」と感じている生徒は、男子は70→85%、女子は79→83%と、これも増加している。

また、「発言できる人は立派だ」と、思っている男子は75→85%、女子は85→90%と増加している。「発言することが大切」と、思っている男子は80→90%、女子は85→95%と増加している。

イ 考えるという要素については、「友人を説得できる発言ができる」男子は25→45%、女子は35→40%と増加した。

ウ 「友人の発言をしっかりと聞ける」男子は70→80%、女子は85→90%と、確実に増加している。

このように、学級活動にディベートを工夫して取り入れた場合、自己表現能力を育成する上で、かなり有効な手段であるという結果が出た。

(2) その他の成果

学級活動にディベートを取り入れて授業をおこなっているうちに、次のように生徒の望ましい活動が見られるようになった。

- ・学級活動での行事への取組みが積極的になった。
- ・授業中に挙手・発言が増加した。
- ・あまり発言しなかった生徒が集団の中で、よく発言するようになった。

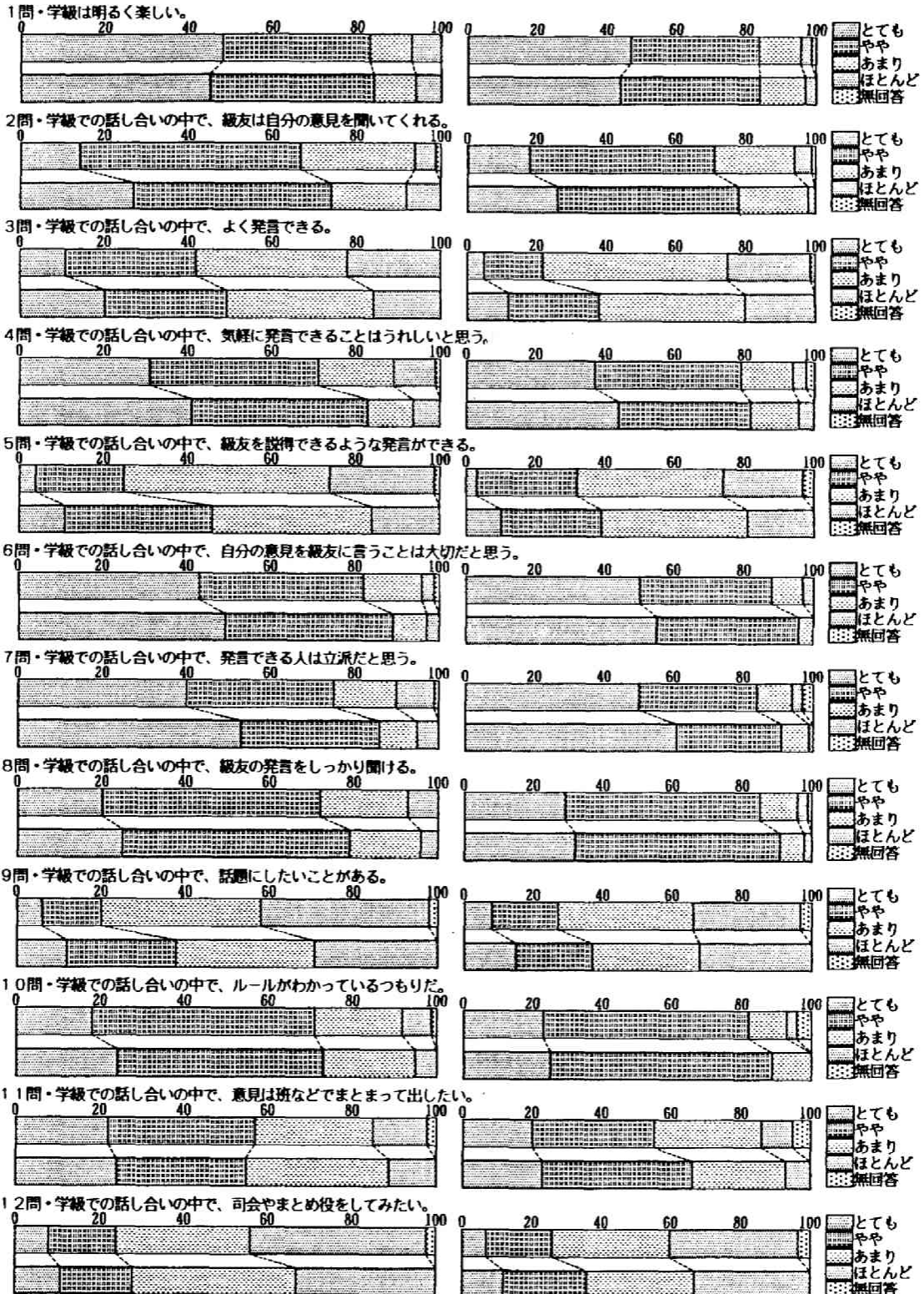
このように、期待以上の効果も多く、研究の当初のねらい以上に、学級が活性化され、

《アンケート調査の比較》

上段……ディベート実施以前
下段……ディベート定着後

男子のデータ

女子のデータ



単位は%

活力ある生徒集団へと変容していく要因の一つとなったようである。

(3) 今後の課題

数回のディベートによる授業を通して、教師は生徒が話し合い活動に積極的に参加する環境を提供したにすぎないが、生徒は自分の力でその姿勢を変えていった。予想以上の進歩が見られたが、いくつかの問題点も残っている。

ア 自己表現能力が思わしく向上しなかった生徒への対応

私たちが考えた自己表現力の要素（P4参照）は、生徒の個性や発達段階に応じて、その内容が変わっていくものと考えている。実際に発言したり、落ち着いて話を聞く姿勢ができていないなど、目や耳で評価できるもの以外では、個々の生徒の内面の成長の度合いを認識することは難しい。ディベートを用いた授業の中でも、その後のいろいろな場面でも、相変わらず一言も発言できない生徒が少なからず存在する。その場合、他の手法による話し合い活動から迫ったり、教育相談やカウンセリングなどの個別指導の必要性を感じる。発言できなくても、作文や教師との交換日記や班日記などを通して、文字による自己表現能力の向上が見られたならば、これは評価するべきであろう。

話し合い活動を通して自己表現能力を高めるために、ディベートと他の討論の手法や個別指導との関連が今後の課題の一つである。

イ 学級経営との関連

ディベートにより、学級が活性化し、活発になることは間違いないが、このとき教師と生徒、それに生徒どうしがお互いに信頼しあい、有機的に結びついていた方がよい効果を期待できる。学級がお互いに支えあうような雰囲気欠ける場合、かえって逆の効果も考えられる。

ウ ディベートによる授業と他の教科・領域との関連（年間指導計画）

本研究では、ディベートの目的を問題解決の手段ではなく、自己表現能力の向上に限定した。しかし、テーマの設定を充分配慮しなければ、ディベートの判定が学校の生活指導の方針と矛盾する結果になる可能性がある。逆に、テーマの設定の仕方により、教科・領域とうまく関連づけられ、より効果を上げられる可能性がある。年間指導計画の中にディベートを取り入れ、いろいろな場面での指導を深め、かつ自己表現能力を高めるための研究をさらに続けたい。

Ⅲ 第2分科会 「生徒会活動の活性化を図り、 生徒の自治的な能力を育てる」～実践を通して～

1 副主題設定の理由

集団が集団としての機能を果たすためには、リーダーを中心とした成員一人一人の自治的、自発的な活動が必要である。学校においても同様で、生徒会役員会を中心とした全校生徒による生徒会活動が重要である。生徒会活動の目的は、全生徒が協力し合い、学校生活の充実や改善を図ること・生徒の様々な活動の連絡調整・学校行事への取り組みなどを行うことである。決して教師にとって都合の良い集団をつくり、校則や規律を中心とした学校生活を生徒に押し付けるためのものではなく、生徒会役員会を教師の下請け的な存在にするということでもないはずである。

本分科会では、生徒の取組みがなかなか全校のものになっていかないという現状を打開するために、生徒会役員会を中心とし「生徒会活動の活性化を図り、生徒一人一人の自治的な能力を育てる」ことが、生徒にとって快適な学校生活を作り、さらに生徒一人一人の自主性及び社会性を身につけさせ、社会的に自己実現を図る能力や社会の一員としての資質を養うことにつながると考えた。教師が生徒会活動の指導・援助にあたる際に、様々な工夫をすることによって、生徒一人一人の自治的な能力を高めていく生徒会活動を展開させていくことができると考え、本副主題を設定した。

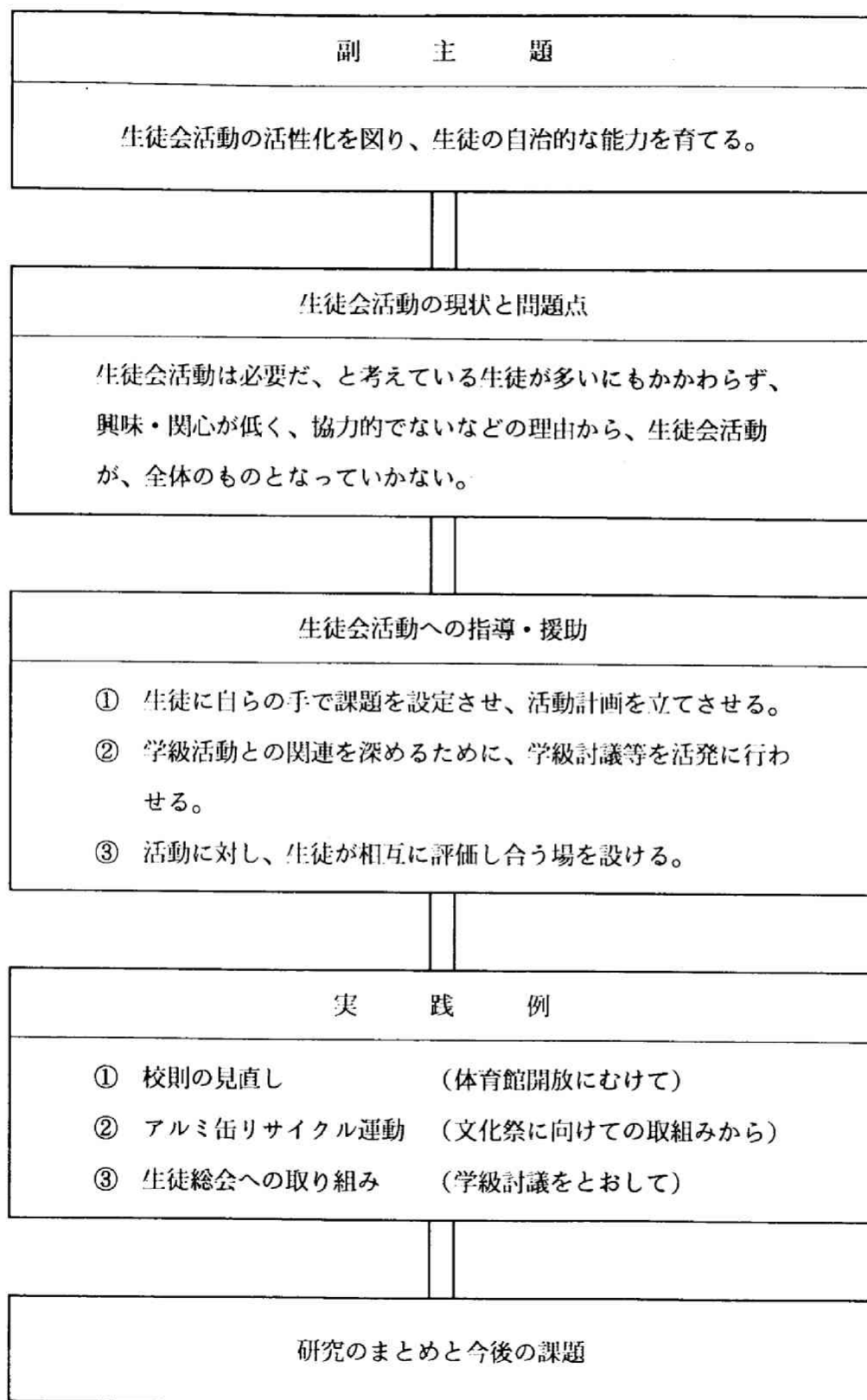
2 仮設の設定とねらい

生徒会活動の活性化を図るとき、自分たちの学校生活を、自分たちの手で変化・改善していくことができるという成就感を与え「生徒会活動を活発に行うことが、自分たちにとって有益である。」ということを全校生徒に認識させることが大切である。そのためには、指導計画が教師の共通理解を図ったものであると同時に、生徒の学校生活における意識をふまえたうえで活動計画がたてられているかどうかが必要になってくる。単に、生徒の自覚の足りなさだけを問題にするのではなく、生徒会活動の立案、生徒会役員会と学級活動との連携、活動に対する評価などの工夫を含めて計画的に進めることが、生徒の自治的な能力の育成につながると考える。

ここでは、①校則の見直し ②アルミ缶のリサイクル運動 ③生徒総会への取り組みの具体的実践をとおして生徒会活動の活性化を図る方策を追究した。

3 研究の内容

(1) 研究構想図



(2) 生徒会活動に対する、生徒の興味・関心の意識調査

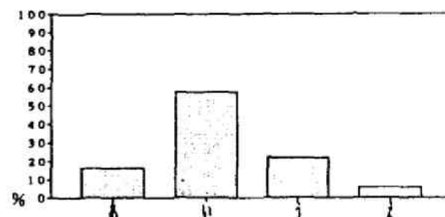
ア 調査のねらい・時期・方法・調査の対象（生徒）

平成5年7月に質問紙調査を実施。公立中学校10校（研究員所属校）の1350名

イ 調査の内容及び結果

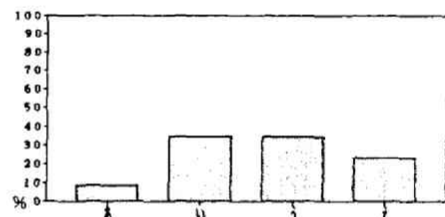
問1 中学校にとって「生徒会」は必要だと感じていますか。

- あ. 絶対に必要 (16%)
- い. 必要 (57%)
- う. あまり感じない (22%)
- え. 必要ない (6%)



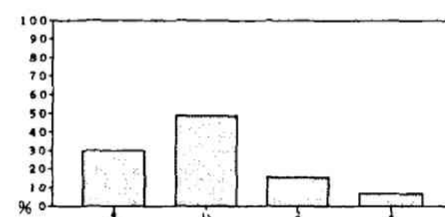
問2 生徒会活動に興味・関心はありますか。

- あ. とてもある (9%)
- い. ある (34%)
- う. あまりない (34%)
- え. ない (23%)



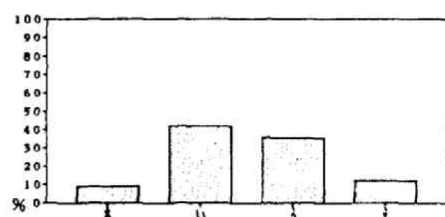
問3 貴校（あなたの学校）の生徒会活動は活発ですか。

- あ. とても活発 (30%)
- い. ほどほどに活発 (49%)
- う. あまり活発とはいえない (16%)
- え. 全然、活発でない (6%)



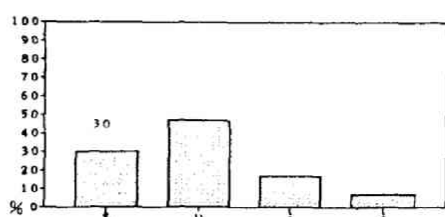
問4 あなたは生徒会活動に協力的ですか。

- あ. とても協力的 (9%)
- い. 協力的 (41%)
- う. あまり協力的とはいえない (36%)
- え. 全然、協力的ではない (13%)



問5 生徒会役員会は全校生徒の意見や要望を取り入れながら活動していると思いますか。

- あ. とても取り入れている (30%)
- い. 取り入れている (47%)
- う. あまり取り入れていない (17%)
- え. 全然取り入れていない (8%)



ウ 考察

問1については、73%の生徒が(あ)(い)を含めて生徒会が必要であると答えている。その理由として、「学校をまとめていく上で必要」「生徒がまとまる」「中心になる人がいないといけない」「生徒の意見を聞いてくれるから」と答えている意見が多い。これは、自分たちの学校生活を充実・向上させるために、生徒会が大切な役割を果たしているという気持ちの表れであると考えられる。しかし、必要ないという理由として、「何をしているのか良くわからない」「あっても無くても、たいして変わらない」「結局、先生たちが何でも決めてしまう」といった、始めから生徒会活動に期待していない生徒の姿を見ることが出来る。

問2については、43%の生徒が(あ)(い)を含めて興味・関心があると答えている。理由として「みんなをまとめているから」「学校を良くする」等が多くあげられている。しかし、問1の必要であるに比べると、約3割の生徒は、生徒会活動の必要性を認めながらも興味・関心は持っていないということになる。その理由として「面倒くさい」「自分には関係ない」「生徒会活動の仕組みや活動内容がよくわからない」「なんとなく」と感じていることがあげられる。つまり、やりたくない、大変そうだ・何をやっているのかわからないの2つの大きな意見に分かれている。これは、生徒会の活動や組織そのものが、一般の生徒に理解されていないためと考えられる。

問3については、79%の生徒が(あ)(い)を含めて生徒会活動は活発であると答えており、自校の生徒会の活動を認めている。しかし、問4においてはどちらかというところ協力的であると思っている生徒は50%に過ぎない。自校の生徒会の活動を認めているのだが協力的ではないという傾向が見られる。これは、問1・問2の必要性を感じているが興味・関心が薄いという傾向と同じである。

問5については、77%の生徒が全校生徒の意見や要望が取り入れながら活動していると思っている。生徒会役員会と一般生徒の距離は近く、8割近い生徒が身近な存在に感じているということになる。

この意識調査からは、必要性を感じているのだが、興味・関心は薄い。身近に感じているのだが、協力的ではないということが全般的に言える。これは、生徒会活動が一部の生徒の活動であるといった一般生徒の考えの表れであろう。したがって、興味・関心をいかに持たせるかが、生徒会活動を全校的に活発にすることにつながると考えられ、さらに、全校の協力を得られる、魅力ある生徒会活動の在り方が問われているとも言える。

(3) 「校則改正（体育館の開放）への取り組み」の実践 —— A中

ア 指導・援助の方針

本実践は、昼休みに、体育館を校庭同様に使用したいという生徒の要望を取り上げたものである。職員会議で可否を決定してしまうことは簡単であったが、本校では、ここ数年にわたり生徒会活動の中心的な取り組みとして抜本的な校則の見直し・生徒会憲章の制定を行ってきた。その実績を活かして、この取り組みでも生徒に一から手順を踏ませようと全教師の共通理解を図った。さらにこの取り組みでは、生徒会の役員が前面に立つのではなく、体育館開放の要望を出した3年生代表生徒を前面に立て、生徒会の役員はバックアップしていくという形をとった。

（指導上特に留意した点は以下のことであった。）

- ① 一部の生徒だけの動きではなく、全校の取り組みとするために、決して性急な動きをしないこと。
- ② 一つ一つの手続きがいつも全校生徒の注目の中で進められていくこと。
- ③ 教師側にも学級活動の場などで適切なアドバイスをしてもらうため、この取り組みの具体的な目標を「生徒達の手で体育館が開放されたという意識を持たせる」とすること。

イ 「生徒会憲章」について

本校では、校則（服装・持ち物）の見直しの際、生徒の活動のよりどころとして、生徒自らが目指すべき目標を掲げた。それがこの生徒会憲章である。柱としては、「自律心を養おう」「自主性を高めよう」「創造力を高めよう」「協同の心を養おう」「平和な学校生活を送ろう」の5項目を掲げている。

エ 指導・援助の経過

- ① 生徒会役員に対し、5月の生徒総会で、3年生代表生徒が「要望」という形で、問題提起を行った。（その際に、「開放して欲しい」という感情だけでなく、提起の理由を明確に主張するように指導する。）
- ② 生徒会役員会は、要望を受け入れた後、3年生代表生徒とともに、具体的な内容について、広報紙や朝会の場で全校生徒に主張を訴えて行った。（ボールの管理・清掃・けが・体育館ばきの徹底などの予想される問題点について検討を加えるよう指導する。）
- ③ 生徒会役員会は3年生代表生徒と共に、この活動がより全校生徒に意識されるよう、署名活動を行った。（臨時に生徒総会を開くという方策もあるが、ここでは、3年生代表生徒に真剣に、活動を推進してもらう意味でも、また、体育館開放の早期実現のため

にも署名運動を行うことを援助する。)

- ④ 朝会の場で、3年生代表生徒により集まった署名を学校長に提出した。(正式な要望書として提出する。このときには教師は「開放を許可する」という共通理解ができている。)
- ⑤ 生徒の要望を受けた教師からは、いくつかの問題点が出されたので、再度学級討議の課題とした。(学級討議の運営の主体は学級の委員なので、学級討議の議題は、ボールの管理・清掃・体育館ばきの徹底など、生徒の手で解決可能なものとする。)
- ⑥ 学級討議の結果をまとめ、再度学校長に提出し、そして許可が出た。

エ 9月からの生徒の動き

実際に開放してみると、体育館が混雑して危険であるという状態にはならなかった。生徒も、ボールの管理・清掃・体育館履きの徹底にはずいぶんと気を使っている様子であったし、時間もしっかりと気にかけて行動している様子は素晴らしかった。さらに、種目をバスケットボールだけでなくいろいろな種目もして行けるようにならないかとか、けが防止のため学年ごとに使用しているものを学年の枠を無くしても良いのではないかといった提案も出されていった。9月末にアンケートを取り、使用状況を問うたところ、問題なく使用しているようなので、割り当て曜日の変更や一部割り当てを無くすなどの変更をし、より全員が利用しやすくした。

オ まとめと考察

本分科会で行った生徒会活動に関するアンケートでは、「生徒会の役員会は生徒の要望・意見を取り入れているか」という質問に対し、「とても取り入れている」と答えた生徒は1年生で59%、2年生で39%、3年生で63%と、とりわけ3年生から高い評価を受けた。

アンケートを行ったのがちょうどこの体育館開放の取り組みの最中であったということも理由の一つではあるだろうが、

- ① 生徒総会での発言を受けたものであったこと
- ② 生徒総会での発言者が代表としてこの活動を推進したこと
- ③ 朝会での発言や署名活動などの一つ一つの手順が全校生徒の注目を集めたことが、その理由であろうと考える。また、このような回りくどい手続きに、代表生徒はもとより、全校が応えて行けたということは評価に値する。ここ数年の本校の生徒会活動が全校に定着していたためである。

(4) 「アルミ缶リサイクル運動」を見直し、文化祭での発表を通して活性化させる取り組み

—— B中

ア 活動の経過

本校では平成2年度よりアルミ缶リサイクル運動に取り組んでいる。目的を設定し空缶を集めてつぶし、袋詰めして回収業者にわたす。そして、収益金を受領する。当初は生徒の発案により環境美化の観点から活動が始まったが、以下のように活動目標が変化しながら浸透していった。

・平成2年度「学校周辺・街の美化」

本部役員が中心になり、全校に呼びかけるが、当番などを決めたりしないで自主的な参加を求め、その輪をしだいに広げようとした。

・平成3年度「車椅子を必要とされている方に車椅子を贈る。」

収益金の使い道を本部役員が提案し承認された。具体的な目標ができたため活動に熱が入り、参加者も増えた。地域にも伝わり協力してくれる人も多くなった。役員改選時の「公約」にも、候補者が運動を活発に行うことをうたうようになり、生徒会活動として定着した。収益金で車椅子2台を購入し、文化祭で成果を発表した。その後、福祉施設に寄贈した。作業は専門委員会の輪番制を導入した。

・平成4年度「環境美化、資源節約」

地域の新聞で紹介されたこと、広報活動をしたことにより日常的な活動となった。移動教室で環境美化活動として取り入れたり、文化祭の学級発表で環境問題に取り組む学級も多く、リサイクル活動の意義を裏打ちする結果になった。作業は各学級の当番制を導入した。

イ 平成5年度「リサイクル運動の改善を図っての文化祭での取り組み」

課題として、アルミ缶を集めるという手段を目的ととらえる傾向があること、評価の新鮮さが失われてきたことにより、活動の沈滞を感じさせることがあがった。そこで、意義の再学習、文化祭の場を有効に使い、活動を活性化させる方策を生徒会役員会が主体となって検討し、教師はそれを援助していくことになった。

(指導上特に留意する点として以下のことがあげられる。)

- ① 押し付けず徐々に活動を広げていくこと。
- ② 目的の設定について、アルミ缶を集めるという手段が目的にならないよう助言を与えること。

- ③ 活動の意義について授業、学活でおりにふれて扱うこと。
- ④ 生徒とともに実際に活動し、励ましや評価を絶えず与えること。

ウ 生徒の活動

- ① B中の空缶リサイクル運動の経過と意義についての放送による全校一斉学習
- ② 収益金の使い道、文化祭にむけての取組み強化案など学級討議、生徒会で決定（車椅子寄贈）
- ③ 全校生徒、近隣地域、PTAへの報告、協力依頼
- ④ 文化祭当日の「車椅子贈呈式」挙行、事後アンケート実施

エ 評価の方法

- ① 「車椅子贈呈式」における、寄贈先代表者・近隣地域・PTA・校長からの評価の言葉
- ② 事後アンケート・生徒による自己評価、相互評価

オ 考察

4月の学級活動で、「B中学校」という題で3年生に短作文を書かせたところ、学年の40%の生徒が生徒会活動について述べ、その内容もリサイクル運動に関するものであった。しかし、一方本校では生徒会活動に対する生徒の興味関心が、アンケートの平均値と比較して高いとは言えなかった。今回の取り組み後のアンケートの結果を見ると「生徒会活動への興味関心がある」「活動に協力的である」等、生徒の意識が向上したことがうかがえる。実際この期間に集めたアルミ缶の量も2年間の総量の約3割を占めた。これらのことから、①今までの活動を振り返り、活動の意義を再認識することが重要であり、かつ目に見える形で成果を示せたこと ②生徒自らが課題を設定し活動計画をたて、学級討議の機会を増やし、広報活動を活発にして中間報告をしたりすることで活動を盛り上げることができた ③更に、それが地域の人などから評価されたことによって、生徒会活動に対して積極的に参加する喜びが高まったことなどが成果として上げられる。

(5) 「生徒総会を活性化させる取り組み」への指導の実践例 ――― C中

ア 取り組みにあたって

生徒総会とは生徒会運営の最高の場である。そこで、生徒総会を盛り上げることによって生徒会活動全体が活発になるのではないかと考え、「生徒総会を活性化させる実践」を試みた。討議を活発にするために「資料内容の充実」「討議資料の読み合わせを入念に行う」「討議時間を十分にとる」などの方策を考えた。また、事後に「評価」を行い、これらの活動の定着を図った。

イ 実践の工夫

① 討議資料内容の充実

各学級での話し合いがより深まるよう、活動計画だけでなく「目標を達成するための具体的な取り組み」と「学級で検討してもらいたいこと」の欄を設けた。また各委員会も前期の反省を生かすために、引継ぎを入念に行った。

② 放送による読み合わせ

学級活動の前半に、放送を利用して各委員長が方針の説明をすることにした。これにより、議案書の内容の定着を図ると共に、生徒総会に向けて生徒全員に意識を高めた。

③ 学級討議の時間の確保

総会の2週間前を学級討議の週として、学級活動の時間を計100分設定した。学級討議では、各学級少なくとも一つは、生徒会として取り組むべき課題を提案させた。

④ 委員会での討議の充実

学級討議を受けての委員会を、その日のうちに開催した。翌日に質問事項に答えるようにして、学級と委員会の連携を密にした。

⑤ アンケートによる相互評価

生徒総会での決議事項が、どれだけ全校生徒に意識付けられたかを評価するために、アンケートを実施した。また、中央委員会において、そのアンケート結果を分析し、各学級に還元することにより、生徒相互の評価を行った。

ウ 生徒の変容

① 学級討議の変化

学級討議の中で、具体的かつ生徒の実態に即した内容の質問がでるようになった。

生徒会役員会へ・「生徒会役員との交流」を具体的に示してほしい。(2A)

・「体育館開放」に向けて、具体的に何をしますか。(3C)

生活委員会へ・遅刻をどうやってなくすのですか。(2B)

・「チャイム着席の徹底」をして何が改善できるのですか。(3E)

部長会へ・なぜ「部活動は6時まで」なのですか。(1B) など

② 委員会での討議の変化

前期の反省や改善点、アドバイスを後期委員に引継ぎ、毎年同じ反省を出している状態から一歩前進した。また、学級討議のポイントを具体的にしたことによって、学級討議を受けた各委員会での話し合いも充実した。

③ 生徒総会の変化

生徒総会においては、意見が採用されなかった学級からも多くの質問、意見が出されその内容も個人レベルではなく、学級レベルでのものであり討議が深まった。

エ 考察・まとめ

生徒総会議案書の形式を工夫し討議のポイントを明確にしたことによって、質問の数も60項目を上回り、学級討議が活発となった。さらに学級討議を受けた各委員会においても、話し合いは十分に深まった。これは、予想以上の成果であった。

議案書の説明と学級討議の方法を放送で行い、徹底させたことについては(前回までは学級の委員が説明していた)聴取態度もとても良く、大きな成果をあげた。問題点としては全学級の活動を拘束するので、周到的準備と全教師の活動に対する理解が必要である。

この取り組みによって、生徒の多くは生徒会役員会を中心とした活動計画の内容を理解するに至ったが、生徒総会後の具体的な生徒会活動の実践が問われる。生徒会活動が積極的に行われ、日に見える成果をあげないと生徒会不信という逆効果を生む危惧もある。事後のアンケートからは74%の生徒が活発に事前の学級討議を行えたと答え、85%の生徒が生徒総会での決議内容を理解していると答えている。このことから、今までの生徒総会に比べて、より充実した生徒総会であったと考えられる。

4 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究では、生徒会が必要だと感じ、生徒会役員が熱心に活動していると感じながらも、自ら協力し、行動を起こそうとしない生徒が多いことに注目し、いくつかの指導の工夫を試みた。その結果、生徒一人一人の意識が高まり、生徒会活動がより活発になった。

A中の実践例では、生徒総会における生徒の要望を取り上げることにより、生徒自らが課題を設定し、活動計画を立て、推進していくという点で大きな成果をあげた。

B中の実践例では、マンネリ化してきた取組みの意義を再確認し、新たな目標掲げることと、生徒一人一人の意識や意欲が高まり、教師・地域等からの評価が励ましとなり、大きく盛り上がった。

C中の実践例では、形式だけになっていた生徒総会を、学級討議の時間を十分に確保し、学級ごとに提案を出させることにより、活発に発言・議論されるものとすることができた。

何よりも取組みの課題が生徒の身近なものであることが重要であるといえる。生徒一人一人の要望を汲みあげ、生徒会活動の取組みへと発展させていく指導・援助をすることが、生徒に自らの手で課題に取り組んだという充実感を持たせることにつながる。また、広報活動や学級討議の役割も非常に大きい。放送や新聞等を利用し、取組みの意義を明確にし、時間をかけて討議させる。さらに、途中経過もそのつど速報を出していく。取組み終了後もその成果を全校生徒に対し明確なものにしていく。

これらの生徒の活動の陰には、全教師がその内容をよく理解し、明確な指針を持って指導にあたることが重要である。

(2) 今後の課題

- ① 生徒会活動は単に、その取組みを消化していけばよいというものではない。ひとつの取組みが終了したならば、適切な評価を行い、次の取組みへの生徒の意欲を高めていく必要がある。そして、生徒会活動をさらに発展させ、質的に高いものにしていかなければならない。
- ② 学校週5日制が実施されていくなか、生徒会活動や委員会活動等の時間が制限される傾向があり、生徒会活動を生徒自身の手で押し進めていくための時間を十分に確保するための工夫をしていく必要がある。
- ③ ほとんどの教師が、生徒会活動が必要であると感じていながら、指導をする時間的余裕がないのが現状で、これが日常的な委員会活動などの停滞の原因にもなっている。このような中で、教師の生徒会活動に対する共通理解をどのように図っていくかが課題である。